

兒の検温は股間が一番計り易い。水銀の部をよく挟むことの必要は幼兒の場合と同じである。

二、一日の生活

授乳——一旦二回の、こびるの休みに母親に乳を吞ませに來てもらふ。母親の働き場所が遠くて、わざわざ來て貰ふ事が困難な場合は、リヤカーか乳母車にのせてこちらから連れて行くとか、小學生に背負はせて連れて行くなどの方法を講じる。夏などは殊に消化器の病氣になり易いので、人工榮養は出来るだけ避けた方がよい。

おやつ——野菜スープ、果物の汁等ならどの赤ん坊に與へても先づ大丈夫である。生後八、九ヶ月以後の赤ん坊には、野菜(馬鈴薯、大根、人蔘等)を大根おろし器でおろして煮たもの、葛湯等與へてよく、お誕生近くならパン、ビスケット・ボール、かるやき、お粥など食べさせることが出来る。併し、一番安全なのは、一人々々の赤ん坊に就き、家で今迄どんな物を食べさせて居たかをよく聞いて、それによつておやつの選擇を決める事である。

用便——授乳後少ししたら、便器にさせてみる。便器にさせる事が出来れば一番望ましいが、慣れない子はどうしても便器にするのを嫌がり、おむつを當てると直ぐやることがよくある。そんな場合には、おむつは直ぐ替へてやりたいものである。汚れたおむつは室外に出して置くこと。又、便にはよく氣をつけて、綠色であつたり、粘液、おつぷつ等があつたり、血が混つて居たりした時は、赤ん坊の様子に氣をつけ、検温すると同時に、醫師に相談しなければならぬ。

清潔——朝來たら、先づ顔や手、足等をきれいに拭いてやる。一日おき位に入浴させることが出来れば大變よい。鹽を借り、お湯を沸すことが出来るなら、是非實行したいものだ。併し、必ず慣れた人に細心の注意を拂つてやつて貰ふ様にしなければならない。

日光、空氣、運動——日に當り、よい空氣を吸ひ、適當に運動することは、乳兒の體の健康な發達の爲にも缺くべからぬ。

さる事である。乳兒を寝かせる場所は、なるべく日當りのよい、窓のあけたての便利な所を選ぶべきは云ふ迄もないが窓の高い場合は疊を積み重ねたり空箱を臺にしたりした上に寝かせる等いろいろ工夫をこらすことが必要である。

又、時々抱き上げて歩いてやつたり、木の葉のゆれるのを見せたり、外へ連れ出して兄ちゃん姉ちゃんやんの遊ぶ様子を見せたりしてやりたい。旬ふ頃の赤ん坊は、危くない限り大いに旬ひ廻らしてやりたいものである。

三、泣き方のいろ／＼

おなかの空いた時——涙を殆ど出さず、からだを動かし、頬に觸れる物の方へ口を近づける。

咽喉の渴いた時——哽れた様な聲で泣き、やはり口を頬に觸れる物の方へ近づけ乍ら泣く。汗をかきながら泣く事もある。かういふ時は番茶か白湯を少し與へてもよい。

眠い時——涙を出さず、だるさうに泣く。目を瞑り、欠伸をする。

痛い時——高い短い叫びを繰返す。涙を出す。

おなかが痛い時——兩脚を曲げたり伸ばしたりしながら泣く。

胸が痛い時——強いけれどごく短い叫びをあげる。

耳、頭が痛い時——苦しさに、額に八の字を寄せて、あまり高くない聲で泣く。

手、足の痛い時——痛む手、足を動かさず、非常に大きい聲で泣く。

×

×

×

乳兒を預る保母は、特に健康な人、そして自分で赤ん坊を育てた経験のある人がよい。預る前の乳兒の身體検査は特に丁寧にし、親からも子供のからだの状態、今迄の毎日の生活等をよく聞いて、記入して置き、毎日の参考にする。醫師や保健婦に時々見舞つてもらへる様なら非常によい。

どの保育所にも、赤ん坊を背負った小學生が澤山遊びに来るし、又保育所の子供が赤ん坊を背中に括りつけて來ることもある。特別乳兒を預る設備のない所でも、時々はいふ赤ん坊をおろさせて、顔や手足を拭いてやつたり、又靜かにねかしたりしてやりたい。かういふことから、村の人たちは、乳兒を保育所に預けることの便利さを知り、皆で相談して乳兒室の設備をしようといふことにもなるし、又さう仕向けねばならない。

参 考 篇

幼兒の集團あそび

1、お船が沈んだ

小さい子供がよろこぶやさしいあそび。みんな手をつないで輪をつくつてゐる。「お船が沈んだ。お船が沈んだ。海の底へ。」と先生が調子をつけていふ。子供はそれに合せて歩く。そして「海の底へ」と云ふ時に子供達は屈むのである。今度はお船が浮んだ。お船が浮んだ。海の上へ。」と調子をつけていひながら屈んだ儘歩く。そして「海の上へ」といふ時にみんなは立ちあがる。これを何度もくりかへす。

2、小さい犬

大きなハンカチ、又は風呂敷を一つ結んでおく。みんなは手をつないで圓を作つてゐる。一人が鬼になつてむすんだハ

ンカチを持ち「私の小さい犬ですよ。けれども誰も噛みません。」といひながら、輪の外側を歩く。

そして不意に「だけどケンちゃんを噛みますよ。」と云つて名指した子供をそのハンカチで軽くうつ。うたれた子供は鬼を追ひかけて輪のまわりを走る。鬼をつかまへたら、今度はその子が鬼になる。犬でなく、外の動物でもよい。

3、巢の小鳥

三人づゝ組になり、二人は手をつないで巢を作り、中に一人が入つて小鳥になつてゐる。この幾組かの巢と小鳥の外に一羽巢のない小鳥を作つておく。先生が手を打つか又はオルガンを引くかして合圖をすると、巢の中の小鳥は皆出て巢をかへる。その時、巢のない小鳥は空いてゐる巢を見つけてはいつてしまふ。入れないで残つた小鳥が又次の折を待つて入る。

4、引つ張り合ひ

男の子によるこぼれる元氣なあそび。二組に別れ、向ひ合つてならぶ。眞中に白墨で線を引く。

先生が「はじめ」と號令をかけると、各々向ひ側の人を引つ張り自分の側へ引き入れようとする。引き入れられてしまつたら、今度はその側の人となり、もとの味方を引つ張らなければならない。五分間で先生が笛を吹くか手を打つかすると一度に引つ張り合ひをやめる。その時人数の多い方が勝になる。併し、「止め」の合圖がきこえずなほも引張つてゐる子供が一人でもゐれば、如何に多数でもその組は負け。

5、案山子

一人の子供が案山子になる。室の眞中にその子は兩腕をひろげ目かくしをして立つてゐる。他の子は皆雀になる。チュウ／＼囀り乍らあちこちとびまわり躍りまわる。先生が手を打つか笛を吹くかして合圖すると、案山子は生きて目かくしをとり雀達を追ひかける。つかまつた子供が今度は雀になる。

(注意)

一、目かくしをする時、手拭の内側に塵紙をあて、手拭と目が直接あたらない様にする。塵紙を一度毎に取返へれば眼病等の傳染を防ぐ。

二、目かくしのかはりに編笠等を深くかぶらせ、合圖と共にそれをはねのけて雀を追ひかける様にすれば一層面白いであらう。

6、積木倒し

これはお辨當の前やおかへりの前に、子供達を靜にさせたい時やるとよいあそび。

子供達はまるくなつて坐る。眞中に長方形の積木を立てて置く。小さい積木なら二つ位かさねるとよい。子供達はかはるがはる靜かに積木にむかつてマリを轉がす。マリが見事に積木にあたつて積木が倒れると、皆は手をたゝいてほめる。

いつも、子供達は、自分の前にマリのあるところがつて來た時だけそのマリをころがす事が出来る。決して席を立ててはならないし、又隣の子の前に來たマリを奪ひとつてはならぬ。(積木のかはりに、だるまさんでも、又おもやちの犬などもよい。)

7、野越え山越え

二組に別れ、各組前以て何か相手に當てさせるものをきめておく。先づ一方が、次の言葉に合せて一足一足進み出る。調子をつけて次の様に云ひながら、

野越え 山越え 里越えて

お向ひの小母さん、今日は!

「今日は!」で一同お辭儀をし、前以て決めて置いたものを身振で表現する。例へば鬼なら兩手で長い耳をつくつてビョ／＼跳ねまわるとか、象なら、片手で鼻を作り、鼻を動かしながらのし歩き廻る等。この場合言葉は決してつかはない。相手方はそれを眺め何であるかを當てる。當つたら早速追ひかけてつかまへる。つかまへたら自分の側に入れる。

これを交互にくりかへす。

8、マ
ー
チ
遊
び

先生がマーチを弾き、みんなはそれに合せて歩く。マーチが早くなると皆も早く歩く。マーチがゆつくりになると皆もゆつくり歩く。マーチがとまつたら皆は直ちにすわらなければならない。すわらなかつた子供はぬかされる。何度もつづけて遊ぶ。

9、ま
り
ぶ
つ
け

これは六、七歳から小學生の子供によろこばれる元氣のよいあそび。小さい子には少し無理であらう。

輪を作り、中に十人位入る。まわりの者が中の子供達にマリをぶつけるのである。當つた者は外に出る。一番おしまひ迄輪の中に残つた者が勝つ。マリは膝の下に當てる様にする。頭や胸や背中に當てない様に氣をつける。

10、人蔘なすかぶら

みんなは圓く手をつなぐ、そのうち一人が百姓になり、輪の中へ進み出て、次の唄をうたひなが種子をまく眞似をして廻る。

にんじんなすかぶら

にんじんなすかぶら

百姓はまきます

種子をばまくよ。

次に立止まり手を腰にする。

1. = ジンナス カブラ = ジンナス カブラ ヒャクショハタキマス
 2. トモヲバエラビ トモヲバエラビ エラビテオヒルヨ

タネヲバ マクヨ コシタネ マイテ ヒャクショハヤス
 タノシグ オドル タラ - - - - - タラ - - - - -

アシビシテテヲウツテ クルリトマワル
 タラ - - - - - タラ - - - - -

とうして種子まいて

百姓は休む。

次の唄通りの動作をする。

足踏みして、手を打つて、

くるりと廻る。

次の唄をうたひながら歩いて行つて誰か一人友達をえらび一緒におどる。

友をばえらび、友をばえらび、

えらびておどるよ楽しくおどる。

タララララララ
タララララララ

タラララ
ララララ
タラララ
ララララ

次にこの二人が百姓になり、今迄のことを繰返す。かうして一回毎に一人づつふえて行つておしまひには皆が百姓になつて種蒔きや踊りをする。なほ、おどる所だけは、輪の中の百姓と一緒に、外側の皆も輪になつた儘おどる方が面白。

(以上の中、6と10以外はミス・ジャンセン「あそびのお時間」よりとった)

一九

お握りのいろく

◇蠶豆お握り

材料 蠶豆、煮干粉、鹽、米

作り方 蠶豆の皮をむき、煮干粉と一緒に米にまぜ鹽加減して炊き込む。

◇鹽鮭お握り

材料 鹽鮭 大根葉、油、米

作り方 鹽鮭を焼いてほぐし、大根の葉は細く切り油でいためて置く。別に御飯を炊き、これに混ぜる。

◇豌豆お握り

材料 青豌豆、煮干粉、鹽、米

作り方 青豌豆はザツと茹で、煮干粉と一緒に米にまぜ、鹽加減して炊き込む。

◇櫻海老お握り

材料 櫻海老 甘藷 鹽 米

作り方 甘藷は小さい賽の目に切り、櫻海老と共に鹽加減して御飯に炊き込む

◇大根おにぎり

材料 大根葉、油揚 醬油 米 煮干粉

作り方 大根葉と油揚を細く切り、煮干粉を入れて煮、醬油で味をつけ、御飯に混ぜ合せる。

◇干鰯お握り

材料 干鰯 里芋 昆布 米

作り方 干鰯は昆布と共に一晩水に漬けて置く。干鰯はほぐし昆布は細かに切り里芋は輪切りとし、干鰯のつけ汁を用ひて御飯に炊き込む。

◇野菜お握り

材料 人蔘 大豆 ほうれん草 蓮根 煮干粉 油 米 砂糖醬油少々

作り方 大豆は前の晩から水に漬けて置き、人蔘、蓮根、ほうれん草は細く切つて、大豆、煮干粉と共に炒め、大豆のつけ汁、醬油、砂糖を加へて煮る。これを御飯にまぜる。

◇南瓜お握り

材料 南瓜 櫻海老 黒胡麻 米 鹽

作り方 南瓜は賽の目に切つて鹽加減して飯と共に炊き込み、ふき上つた時、櫻海老と黒胡麻の炒つたのを入れてたき上げる。

◇黄粉お握り

材料 黄粉 鹽 砂糖 米

作り方 黄粉に少量の鹽と砂糖をまぜ、お握りにまぶす

◇胡麻鹽お握り

材料 黒胡麻 鹽 黄粉 青海苔 煮干粉 米

作り方 鹽を炒り、鹽の水分のなくなつた時黄粉を加へて更にさつと炒る。黒胡麻をすつたのに青海苔を揉み入れ、これを前の黄粉に加へ、煮干粉を加へてよく混ぜる。以上が榮養胡麻鹽の作り方である。これをお握りにまぶす。

◇稻荷ずし

材料 油揚 人蔘 干海老 米 鹽 酢

作り方 御飯に酢、鹽、砂糖をまぜて置く。人蔘はせん切りにし、干海老と共に醬油、砂糖でうす味に煮る。油揚は砂糖、醬油で煮て一方を開いて置く。人蔘、海老を御飯にまぜ、開いた油揚にその御飯をつめる。

◇煮干粉の作り方

煮干をよく炒つてむしり細くして、摺鉢でよく摺つて粉にする。

(備考)

以上の中、榮養胡麻鹽お握り、大根お握り、煮干粉の作り方の他は、帝國農會「農繁期榮養食共同炊事の事例」よりとる。但し、同書中に削節を用ひてあるものは全部煮干粉に改めた。安く且つ榮養價多き煮干粉は、農家で暇な時一度に作つて置いて、毎日の煮物や味噌汁の中へ入れる習慣をつけたものである。(阿部)

おやついろいろ

◇甘諸から揚げ

材料 甘諸 砂糖 醬油 油

作り方 甘諸はうすく輪切りにしても、粗く賽の目に切つてもよい。油でカラカラになる迄揚げて、醬油と砂糖をまぜた蜜の中にまぶす。

◇馬鈴薯ふきんしぼり

材料 馬鈴薯 鹽 砂糖少々

作り方 馬鈴薯を蒸し或は茹で、(茹でた場合は茹で汁を捨てないで他に利用する)摺鉢或ひは鍋の中でよくつぶす。

◇南瓜黄粉まぶし

材料 南瓜 黄粉 砂糖 鹽

作り方 南瓜を切つて茹で、黄粉に砂糖と鹽で味をつけたものでまぶす。

◇いためうどん

材料 うどん ほうれん草 人蔘 馬鈴薯 油 鹽 煮干粉

作り方 馬鈴薯をせん切りにして油で炒め、ほうれん草、うどんを加へ更によく炒めて、おろし人蔘を加へ、鹽と煮干粉で味をつける。

◇煮込みうどん

材料 うどん ほうれん草 人蔘 醬油 鹽 煮干粉

作り方 野菜は有合せのものでよい。うどんと野菜を一緒に煮て、煮干粉、醬油、鹽等で味をつけ、煮えたら、人蔘のおろしを加へる。

◇狸汁粉

材料 小豆 砂糖 甘諸

作り方 小豆を煮てお汁粉を作り、餅の代りに甘諸を入れる。

保育所日誌の一例

[illegible]

（注意）表中の太字は騰寫しておく

保育記録の一例

○月○日 火曜日 晴後曇

出席兒 六十二名（女三十九名 男二十三名）

おひる給食 五目飯おにぎり

おやつ 午前 ドロップス五個

午後茹でた馬鈴薯

今日は保育所始まつてやつと三日目。最初の日は開所式で午前中で返し、二日目の昨日は午後三時迄でおしまひにした。午後六時迄預るのは今日始めてなので、長い一日を無事に過せるかしらと何となく心配になる。

朝六時一寸過ぎ、まだ掃除も済まぬ中に押しかけて来る子供達、相變らず赤ん坊をおぶつた小學生が二十人ばかりやつて來た。新しく來た子を順におしつこにやる事を手傳つて貰ふ。私は洗面器に水を汲んで、おしつこから出て來た子供の一人々々の顔と手を洗つてやり、からだに異常はないかをしらべ、着物の紐の解けさうなのを直したりしてやる。田山さん（もう一人の保姆）はしらべの濟んだ子供達を遊ばせる。小學校の先生がよく前々から話して置いて下さつた爲か、小學生がよく手傳つてくれるので有難い。

高野わくり（満三歳六ヶ月）が青い顔をしておばあちゃんの腰に掴まつて居る。おなかでも悪いのではないか、昨日は御飯を食べたか、昨夜の様子は？ など聞くと、おばあちゃんは「なあに此の子はいつもこんな色でがす。」と云ふ。母乳が出なくて練粉で育てたせいだらうと云ふ。熱もなさうなので兎に角預る事にする。ところが今度はどうしてもおばあちゃんの絆纏を掴んで放さない。小學校の姉ちゃんがおしづこに連れて行かうとしてもその手を突きのける。私が少し焦つて無理に抱き上げたら、わあーと火のつく様に泣き出した。どきつとしたが、此處で負けてはおしまひだと無理矢理

ブランコの方へ連れて行つたが、物凄く勢で私の手を振りほどいてあつと云ふ間におばあちゃんにしがみついて居る。おばあちゃんは口では「こら！泣くでねえ。」と叱るが内心はおろ／＼して居る様子。「先生、今日だけ連れて歸らしてもらひますべえ」と云ひ出した。

「おばあちゃん忙しいの。」と聞くと、家には小學校に行つて居る孫が留守居して居るから少しゆつくりして行つてもいいと云ふ。これ幸と、暫く子供と一緒に遊んで行つて貰ふことにする。私はわざと知らん顔してわくわくちゃんから遠ざかつた。わくわきは始めはおばあちゃんの後から恐る恐る皆の遊びを見て居たが、やがて田山さん達のやつてゐる「かゝこめ／＼」の仲間におばあちゃんと一緒にはいらせられた。頻りにもぞ／＼するおばあちゃんを田山さんは無理々「かこめ」にしてしまつた。輪の中で固くなつて目を瞑つて居るおばあちゃんの後でわくわきはもうすつかり泣きやんで、皆と一緒に遊ぶのを面白がつてゐるのが顔の表情でよくわかる。

これでひと安心、後は田山さんに委せませうと目を砂場の方に移す。青年團の人々が川原から運んでくれた砂で、部落の家々から集めた鉄けしや竹筒などを使つて子供達は夢中で遊んで居る。ふと氣づく、武男（満四歳）が變な表情をしたと思つたら、忽ち、ビリ／＼とそこへ大便をしてしまつた。駈けて行つて着物を脱がせてみると幾分軟い程度で、大した異状もない。小學生を頼んで近所の家からお湯をもらつて来て貰ひ、すつかり洗つてやつたはいいが、さて着物をどうしよう。パンツと襦袢の備へ付けはあるが、大便は着物迄汚してゐるのに着物の備へ付け迄は此處にはない。途方に暮れてしまつた。すると小學生のかねちゃんといふ子が「先生、毛布にくるんで待つてれ。俺が武男の家へ行つて着物持つて来てやる。」と云ひ、駈け出して行つて、持つて来てくれたので助かつた。武男はおなかも痛くないと云ひ、着物を着替へさせたらもうケロッとしてゐる。開所式の時この子の母親が「實は」と思ひ切つた様にして云ひ出したのは、武男は此の年になつても大小便のしまりがなしいといふ話であつた。こんな子をお願いするのは申譯ないが、家には年寄りはない

子供と云つても武男と、二つになる赤ん坊だけなので、武男を預つてでも貰はなければどうにも仕様がなないと云ふ。赤ん坊はどうするのかと聞いたら、仕方ないから田んぼへ連れて行つて「そこらへ轉がしてでも置きますべえ」と云つた。（この保育所に乳兒をも預りたいと私は随分お願いしたのだが、人手もないし、萬一のことがあるといけないからと云つて役場の人がどうしても聞き入れてくれなかつた。）

そんな日のある武男だが、あの時はあつさり引き受けてしまつたものの、今日の前でやられてみると、こんな事が毎日あつたらどうしようと胸がどきどきしてしまふ。武男は幾分頭にも缺陷があるのではなからうか？一體にぼんやりした子らしいが、大便などしても泣きもしなければ慌てた様子もなく、けろつとして居る。後でお醫者さんに相談してみよう。そして此の悪い癖が直るものなら、保育所へ來たのを機會に是非直してやりたいものだと思ふ。何や彼やと騒いでゐるうち八時を過ぎる。子供達も大分落着いて來たらしいので、今日から目洗ひを始めせうと田山さんとも話合つて居た通り、目脂のひどく出てゐる子だけを集めて來る。段々に全部の子の目を洗つてやりたいが、今日はまだ保母も子供も慣れないしするので、特に悪さうな子だけ試みに洗つてみることにする。アルミニウムのコップを手持たせ、水を一杯たゝえてその中へ目をつけさせ、パチ／＼やらせてみる。中々うまい具合に行かない。何度も私自身がやつてみせては子供に練習させた。洗つた後は消毒ガーゼでそつと拭いてやつた。目脂で目が寒がりさうだつたミツちゃんなど、洗つたらきれいなよい目になつた。他の子達が「ミツちゃんめんこくなつた。（かわいらしくなつた。）」と讃めるので、ミツちゃんも嬉しさう。後で私の所へ來てそつと何か囁くから何を云ふのだらうと思つたら、「センセ、アシタモメアラハウネ。」と云ふのであつた。

九時頃、手洗ひ（皆で長いトンネルを作り、五人づつ其處を潜つて手洗ひに行くことにしたが、大きい子は出來るが小さい子には一寸無理だ。三、四、五歳の子供達は、後から、保母が五人づつ連れて行つて洗つてやる。）をして、お集りをす

る。笛を吹いても手を打つても知らん顔でおすべりや砂場で遊んでゐるので、私は、小學校から借りて來た掛圖を持出して、「皆、いいものを見せるから集れ」と叫んだら、効果てき面、ぞろぞろと集つて來た。田山さんが、小さい子を前に、小學生を一番後に、整理して下さつた。「サイタ／＼サクラガサイタ。」の繪やツクシンボの繪など一枚々々見せて行くと大喜びである。やつと氣持も集中したらしい頃、大きな聲で一緒に「オハヨウ」と云つてみる。「センセイ オハヨウ」「モウヒトリノセンセイ オハヨウ」「オヒサマ オハヨウ」「タケチヤン オハヨウ」などと云つて居る中、皆が大きな聲で云へる様になつた。「今度は大きな聲で返事出来るかな。」と、名前を呼ぶ。大きな聲で、と云つたので、耳も裂ける様な聲で「ハアーイ」といふ子がある。さうかと思ふと武男など何度呼ばれてもほんやり私の顔を見るばかり。

「むすんでひらいて」を教へる。「むすんでひらいて」をしながら、きれいな目、きれいな顔、きれいな手をほめてやる。皆で一緒に一つのことをするのにまだ慣れない子供達は、まだ十五分も経たないのにもう飽きて來たらしい。一人でとこ／＼おすべりへ遊びに行く子、押し合ひから喧嘩を始める子も居る。今日のお集りはこれ位でおしまひにして置く。少し遊ぶと直ぐおやつ。

おやつのだろツプは子供達に大持てだつた。きつと始めて食べる子も居るのだらう。「おれのはアカイハナだ。」「おれのはキイロだ。」「何だい。オレのが一番うめえんだぞ。」などとベチャクチャ／＼喋つてゐる。小學生に背中の赤ん坊を下ろさせて、晝寝用の毛布の上へ暫くねかせる。小學生にもだろツプを三つづつやつた。

だろツプを食べ終へる迄子供達を坐らせて置かうと思ふと容易なことではない。口に入れた残りを片手に握つて遊びに出かける。田山さんが瘤取り爺さんのお話をしてやると始めこそ熱心に聞いてゐたが、又一人二人と立上つて遊びに行つてしまひ、最後迄坐つて食べて「御馳走様」を云つた子は僅かに十人だけ。

十時半頃から今日の給食當番であるミツちゃんのお母さんと五郎のお母さん、それに女子青年團から二人手傳ひに來て

くれる。

十一時半には見るからにおいしさうな五目飯おにぎり山と積まれた。小學生の女の子にも手傳つて貰つて三つづつお皿に盛る。握り方を加減してもらつて、同じ三つでも小さい子の分量は少くして貰つた。手を洗つて飯臺（小學校の裁縫机を借りたもの）のまはりに集つた子供達は目を輝かせてお握りを見つめてゐる。たかし、行子、友男など物わりのよささうな子に配つてもらふ。自分の前に配られるや否やムシヤ／＼と食べ出す子供が今日も又相當居る。昨日教へられた通りちゃんと手をおろして待つて居る子も居る。さういふ子は、待ち切れず食べ始めた行儀の悪い子を批判して「あーあ、よし坊わるいな。イタダキマス云はないうち食べちゃつた。」などと云ふ。それを聞いて慌てて食べかけのお握りを置いて手を下にする子も居る。

「ケフのおにぎり誰が作つてくれたの?」と聞くと、皆口々に「ミツちゃんのをばさん」「五郎のをばさん」「新子のねえちゃん」などと云ふ。お待ち兼ねの「頂きます」を云つてむしや／＼食べ出す。わくりも何時かおばちゃんから離れて他の子の間に入つて盛に食べてゐる。おばあちゃんは後でやはり心配氣に見てゐるので、もう大丈夫だからと話して歸つて貰ふ。武男はあれから元氣に遊んでゐたので、念の爲小さく握つたのを食べさせる。五目お握りの中には別に特別な消化物も入つて居ないからよいだらう。

皆の食べ方が餘り猛烈なので、私は、わざとゆつくり嚙んでみせる。

「センセイがどうしてこんなに大きくなつたかつて云ふと、御飯をよく嚙んだからよ。」と話してきかせる。それを聞いて急にユツクリ食べ出す子、私の言葉など耳にも入らぬ様に相變らずガツ／＼食べて居る子さま／＼である。

「たかしちゃんは今にきつとどんどん大きくなるよ。」何故だらう?と皆は不審さうな顔をする。

「みんな たかしちゃんの方見てごらん。どんなにして食べてる?」

「よく噛んで！」と叫ぶ子が居る。

「さう。よく噛んで食べるから、たかしちゃんどん／＼大きくなつて、おしまひには先生より大きくなるよ、きつと。」と云ふと、皆眞似してゆつくり食べ出した。

ぼろ／＼こぼす子が随分居る。段々にこぼさないで食べる練習もしなければならぬと思ふ。明日から、小さい子の前に新聞を八つ切り位にしたのを敷いて置かうか等と考へる。大體食べ終つた頃、「こぼした御飯粒を拾つて頂戴ね。」と云つたら、皆拾つては口の中へ押込むので慌てて止めて、落つこちた御飯を食べると病氣になる、と話すと、「んでも、おらい（私の家）のカアちゃんに拾つて食べれと云はれた」と云ふ。保育所の仕事は母親教育と結びつかねば何一つ効果を擧げる事が出来ぬと云はれた意味が始めてわかつた氣がした。晝食後繪本を見せて少し遊ばしてから毛布の上へ横になつた。小さい子は割に直ぐ眠つたが、六、七歳の子は今日もなかなか眠らない。子供と一緒に田山さんも私も一寸横になつた。横になつて子守唄を唄つて居るうち、いつか疲れが出てう／＼したらしい、ふと疳高い叫びに目をさますと、義男が起き上つて、寝て居る子の一人々々の頭をビシャ／＼打つて歩いて居る。女の子の擧げる悲鳴に折角眠りかけた子も目をさます始末、「義男さん！」とたしなめると、何を思つたか義男は急にはだして外へ駆け出した。「どこへ行くの？」と聞いても返事もしないで畦道の方へ出て行く。田山さんに後を頼んで追ひかけると、どん／＼駆け出して、とても疾くて追ひつき様もない。義男はからだも大きいし、しつかりした子だから大して危い事もあるまい、と思ひ、一旦保育所へ歸つた。十人程の子が騒ぎも知らず眠つて居るばかり、他の子は皆起き上つてしまつてゐる。もう一度横にしても眠りさうもないので、おしつこにやり、寝てゐる子の邪魔にならぬ様靜かに遊ばせることにした。折紙を一枚づつ配つて裏と表、色の名前等教へてから、三角に折つてお山を作り、指でお山の登り降り、お山のてつぺんから下を見る所、お山の途中で休んでお辨當食べる所等して遊んだ。その中眠つて居た子もぼつ／＼目を覺し始めたので、手を洗ひ、おやつを支度をした

忙しいお母さん達におやつ迄作つてもらふことは出来ないで、女子青年團の人と小學校高等科の女生徒に頼んで、今日は馬鈴薯を茹でて貰ふことにしてあつた。丁度子供達が飯臺の前へ坐つた頃、ほか／＼とおいしさうに湯氣の立つ馬鈴薯が運ばれた。「あつ／＼吹いてお上がり。」と云ふと、子供達は面白さうに争つて吹いて居る。楽しいおやつの中に、村役場の書記さんが自轉車で廻つて見えられた。「ほう、おいしさうだね。おちちゃんも欲しいね。」と冗談を云はれると、子供達の中には本氣にして「おちちゃん、やるよ。」と食べかけのくしや／＼になつたおいもを差出すのも居る。書記さんのお話に、此の前からお願ひして置いたラヂオを村の方の費用で設へ付けて下さる事に決つた由。これをきいて私と田山さんは思はず聲をあげて喜んだ。實は開所前に開いた母の會の時、給食を是非實行したい、といふ話と一緒に、ラヂオを子供達にきかせたいといふ話が出て、母親達皆の希望として、ラヂオを備へ付けて貰ふ様に役場へお願ひして置いたのである。始めはラヂオなど贅澤だといふ様な意見も村の有力者の中にあつて、この希望の實現は難しさうだつたのだが、私共の熱心が結局聞き届けられたことは何と云つても嬉しいことだ。書記さんは、保育所の中を見廻られ、子供の一人々々にも注意して見て下さつた上、何か困つてゐる問題はないか、と聞かれた。困つて居ることは數々あるのでいろ／＼お話した上、武男のこと、又逃げ出した義男のことなども話して、保育に不慣れな自分は途方に暮れてしまふと思はず愚痴を並べてしまふ。書記さんは武男はやはり一度醫者に見せた方がよい。自分からも村の醫者によく話して頼んで置いてあげると云つて下さる。逃げ出して家へ歸る子はどこの保育所にも必ず二、三人から五、六人はあるこれはどうも困つた問題だね、と考へ込んで居られた。

書記さんが歸り、おやつも済んだ。私は義男のことが氣になるので、義男の家へ行つてみようかしらと田山さんに相談すると、田山さんは、「あなたに行かれると、とても私一人で六十人の子供は見られないから、行かないでくれ。」と云ふ。それもさうだ。併し義男は心配だ。どうしようと二人でこそ／＼相談して居ると、貞子が私の袂を引張る。「センセ、ミッ

「ちゃんか帰るよ。」

「えつ」と驚いて指さす方を見ると、なる程ミツちゃんが着物の裾で涙を拭き／＼外へ出て行く。急いで追ひ付いて、「ミツちゃん、どうしたの。」ときくと急にしゃくり上げて泣き出した。それでも手を引いてやると素直について来る。外の子供達から離れた隅つこに連れて行つて、涙を拭いてやつてから、「どうしたの。誰かが苛めたの。」ときくとこつくり頷く。よく聞いてみると、男の子が「異人の子」と云つてぶつて逃げたのだと云ふ。ミツちゃんは縮れ毛なのだ。「いけない子だね。先生と一緒にあそぼうよ。」とお砂場に連れて行つておだんごを作つて一緒に遊んで居るうちやつと機嫌が直つた。

空は午後から曇つて來たが雨が降りさうでもないので、向ひ側の原つばへ遊びに行くことにした。子供達を皆集め、「ハッパへ行き度いか。」ときくと、皆大喜びで、「行くべ、行くべ。」と云ふ。おしつこに行き、鼻をかみ、大きい子を前に、小さい子を後に並べる。十人に一人位の割に小學生に中へ入つて貰ひ、人數を數へてから、前の原つばへ繰り出した。直ぐ近くだが、念の爲救急袋とパンツの穿き替へを二つ程持つた。原つばに來ると子供達は急に生還つた様に元氣になり、追ひ駆けつこをしたり、相撲を始めた。大騒ぎである。何故もつと早く此處へ來て遊ばなかつたのだらう。子供は自然の子と云ふが、明日からは、お天氣の日にはなるたけ原つばや河原などで遊ぶことにしよう。

ふと氣づくと、何時の間にか義男がひよつこり歸つて來て愉快さうに相撲をとつてころげ廻つて居るではないか。

暫く遊んで夕暮も近くなつたので保育所へ歸る道々、私は義男と並んで歩きながら、「義男は何故さつき黙つて家へ歸つたの。」とさりげなく聞いてみた。「先生が寝ろ／＼つて云ふからだい。」「そんなに寝るの嫌?」「うん」とはつきり頷いた。義男の様な活力の旺盛な子を寝かせるのは無理なのかも知れない。

「ぢや、明日から寝かせないから、黙つて家へ歸るんぢやないよ。」

「うん」

「その代り皆が眠つて居る間邪魔しないで遊ぶんだよ。」

「うん」

私は素直に頷く義男がとてもいぢらしくなつた。

「明日お天氣だつたら川原へ行かうか。」と云ふと、義男は、目を輝かせて、

「うん。おれ、石投げうめえぞ。」と云つた。

保育所へ歸り、手洗ひ、うがひなどして居るとお歸りの時刻も近づいた。

まあるくなれ、まあるくなれと唄ひ乍らまろくなつて、ハトポツポの遊戲をし、今朝習つた「むすんでひらいて」をし皆で一緒に大きな聲で、「サヨナラ」を云ふ。

明日も元氣で泣かずに來る様に約束し、「わかつた人は高く手をあげてごらん。」と云ふと、子供達は競つて小さな手を舉げるのだつた。近所の子は連れ立つて歸つて行く。小學生に頼んで、同じ方向に歸る子は一緒にやつてもらふ。

高野わくりのお父さんが野良着の儘やつて來た。今迄おとなしく遊んで居たわくりは父親の顔を見ると急に泣き出した。

「朝も泣いたさうだね。」

と、父親はわくりを抱き上げながら云ふ。「家にばばも居ることだし、あまり泣く様なら先生にも迷惑かけるしするか——。」

と早くも子供を保育所に出すことに怖氣づいて居る様子である。私は、家におばあさんが居るなら無理して預らなくとも、といふ氣もするし、一人でも手の掛る子が減つてくれればそれだけ樂になる、といふことも考へられて來たが、一人でも多く村の子をよく育ててやりたい、そして村の人の一人でも多くに保育所の眞の意味を理解して貰ひたいといふ烈しい願望を感じる時、どうしてもわくりを此の儘放り出したくないと思はずには居られないのだつた。

「でも、お父さん、わくりちゃんは直ぐ泣きやんで、一日とても元気に遊んだのよ。こんなに早く馴れる子は珍しい位よ。それに保育所でブランコやおすべりで遊んだり遊戯を教へてもらったりすれば、家でおばあさんにお守りして貰ふよりどんなにいいか知れないでせう。」

餘り勢込んで喋り立てたせいか、お父さんはわくりを抱へた儘半分呆氣にとられて居る様な氣がしたので、

「でも、よく家で相談してみなすつて、一番わくりちゃんの爲になる様にきめて下さいね。」と云つた。

お父さんは、「へえ」と云つてお辭儀をして歸りかけたが、又戻つて来て、「先生、おらの家直ぐそこだから、お暇の時話しにお寄んなすつて下さい。見苦しい家だが。」と云つて歸つて行つた。

皆歸つて急に淋しくなつた保育所の掃除を済ませ、手拭を洗ひ、日誌などつけ終へると、田山さんも私もぐつたりして、腰を下すともう立ち上りたくない程疲れが身に重くのしかかつて来る様な氣持である。

それでも口を開けば話は矢張り子供のことより他に出ない。

僅か三日ばかりの間にオハヨウも大體ハツキリ云へるし、返事も出来る様になつた子供達、心配して居た目洗ひも喜んでやつてくれた子供達、この調子で行けば、辛棒強い私達の努力はきつと子供達の生活を少しづつでも進歩させて行く事が出来るに違ひない。併し又、注意を一つに集中出来ない子供達、晝寝の嫌ひな子供達、義男、武男、わくり、など問題の多い子供達のことを考へると、一體自分達未熟な保母の力でどれだけの事が出来るであらうか、と、重苦しく氣が沈んで来る。

明日は、朝のお集りの時「水を澤山汲んで来てみんなで顔(お手々)を洗ひませう」の遊び「水鉄砲」のかへうたをつかつたあそびと一緒に顔や手の洗ひ方を教へよう、殊に手の指先をよく洗ふことを教へよう。午前中お天氣だつたら川原へ行き、石ころを蒐め、歸つて来てよく洗つて日なたへ乾して置き乾いたら石ころならべ等して遊ばう。おひるには、よ

く噛むことを一層徹底させ、姿勢にも氣をつけること、そして床に落ちた御飯粒を拾つて食べると病氣になる話を童話にして話してやらう。午後は爪切りをしよう。お歸りの唄を教へよう。などと大體の計畫を立てた。今日は餘り疲れたから、明日の歸り、わくりの家など二、三軒訪問してみようといふことも話し合つた。

戸閉りをして外へ出るともうあたりはほの暗く、空には星がまばらに瞬いて居る。又明日元氣に子供達と遊べる様に今晩はぐつすり眠らうと、蛙の鳴く田圃道を二人は黙つて足を早めた。(阿部)

經營事例

本事例は帝國農會經濟部並靜岡縣社會事業協會の調査したるものである。

其の一 村と部落の共同經營の一例

村營笠柳農繁期託兒所

新潟縣北蒲原郡木崎村

一、經營主體 木崎村並大字笠柳横井兩部落。笠柳部落は大字笠柳(九一戸)大字横井(二七戸)の兩字に分れてゐるが、町村制施行以前から部落協議費を共通にして各種の行事を同一とし昨年の一月から單一の部落常會を持ちつゝあるので託兒所經營も共同とすることにしてゐる。

二、沿革概要 本部落は梨及蔬菜栽培盛んで、他町村が耕地一反歩に勞力十五人位しか要しない所を、木崎は平均六十人要る。殊に婦人は新潟市、新發田町へ毎日農産物を賣りに出掛け、殆ど五月半から十一月末迄は、農村に働く婦人の三分の二は市場へ賣物に出て居る。そんな關係で昭和四年に創設、同六年から村補助金一ヶ所三十圓づゝ出してゐた。本年も小字で八ヶ所六百五十餘人の兒童を扱つた。當部落の託兒所も其の中の一である。

本託児所開設には本村更生主事川瀬新藏氏の主張と努力に専ら負ふ處が大である。

三、区域内の概況 本部落は新潟市へ三里、新發田町へ三里、稻作を主とし梨、蔬菜栽培盛である。

(イ) 總戸數 一一八戸(現在人口 八三九人)

農 家 一〇七

商 工 九

其 他 二

(ロ) 耕 地 水田 一、三九四反

畑 四八七反(他に山林原野三一反)

(ハ) 經濟狀態本部落には大きな地主なく

小作兼自作 七 割

自 作 二割五分

純 小 作 五 分

の割合で經濟狀態は比較的良く平均してゐる。

(ニ) 本村は舊來小作料高く反當一石五斗位で、それが元で昭和二年小作爭議を起し全國に於て小作爭議發祥の地としてその名をとどろかしたが、そのお蔭で小作料も九斗から八斗に減じ農家經濟も近年著しく向上に向ひつゝある所である。

四、時期及期間 季節的農繁託児所であつて春期及秋期の二回開所する。

春 期 五月二十四日——八月一日迄七十一日間(内四日間休)

秋 期 九月二十四日——十月二十三日迄三十日間(内二日間休)

第一日曜と第三日曜とを休む事になつてゐる。

五、託児所の位置 笠柳部落の略々中央

六、受託兒童數

昨年の春期及秋期の受託兒童數は次の様になつてゐる。

年齢	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	計	同上中遺 家族子女	備 考
男	四	一一	一一	九	七	四三	七	一日平均受託兒童 七五人
女	五	一〇	一三	一一	五	四四	六	開所中兒童延人數五〇二五人
計	九	二二	二四	二〇	一二	八七	一三	同上 世帯 五九世帯

七、託児所の施設

(イ) 建 物 春秋二回共寺院を使用し、保育室として本堂並に接續の二室計二十四坪を之に當ててゐる。

(ロ) 屋外運動場は寺院の境内と隣接神社の境内と合計四五〇坪を使用してゐる。

使用料金は一期寺院へ五圓、神社へは出さ無い。寺院へは五圓の謝禮の外部落の有志で障子張り、庭掃除等をなし又時々野菜等を獻ず。

(ハ) 娛樂設備 ブランコ二臺、七臺一ケ、砂遊場

玩 具 ゴム球、ゴム風船、パッチ、玩具時計、積木、小玩具は三日毎に變へる(一人分七厘—八厘)

子供が最も飽きずに喜ぶものはブランコ、砂あそび、積木の順で七臺は初めは喜ぶがすぐ飽きが来る。

(ニ) 食 器 中食は各自持参せしめる爲兒童の食器の要はない、只午前午後二回に「おやつ」を給するのでその容器として木製の「都菓子皿」百枚をおく。百枚五十七錢で、一期損傷割合は一割五分位の程度である。

(ホ) 衛生用具 水香場(水ガメ一ケ、ノミロ二ケ、水香器五ケ)、手洗場(バケツ二ケ、洗面器三ケ、杓子二ケ)、其他帚、雑巾、ハナ紙(役場の古い帳簿用紙を利用)

(ヘ) 炊事施設 中食は辨當持参としてゐるので施設はない。但し臨時に食事を給する場合は寺院の炊事設備及食器を借用することになつてゐる。

八、擔任者

(イ) 保 姆 保姆一人 保姆助手二人

(ロ) 保姆の資格 保姆 二十一歳 新潟高女卒、保姆の短期講習終了

助手 十九歳 三條工藝卒

二十九歳、村の雜貨商の嫁

(ハ) 給 料 保姆 賄付一ヶ月二十五圓他に慰勞金一期五圓、赴任・歸任の旅費を給し又、兒童の父兄から謝禮を受ける

助手 拾圓及拾五圓(各一ヶ月)

九、經營大要

(イ) 受託開始時刻

春 期 毎日午前七時——午後六時

秋 期 毎日午前七時半——午後四時半

(ロ) 受託兒童の衣服

一定のものを指定せず、常着を着用させる(調査人員七人)

種類	地	質	新	古	人数	備 考
和 服	木綿	三九	一七	二二	五一	木綿中にはガス地、人絹、縞、飛白等の種別がある。
洋 服	木綿	二〇	九	一三	二三	古品の中には全くの古品と中古品とがある。
簡單服	富士絹	二一	二	一	三	
計		二八	四九	七七		

(ハ) 受託兒の制限

別に規則の中には明示しないが開所當日の注意として傳染性血膜、「トビヒ」(皮膚病の一種)、「百日セキ」等は遠慮する様に申傳へる。

(ニ) 保姆の訓育狀況

兒童は二人の助手を中心とし赤、白の組に分ち年齢によつて遊戲等を考慮して行ひ、毎日託兒所日誌を記入させる。

(ホ) 食事給與

中食は持参させて午前十一時半に食事せしめ午前十時と午後三時の二回に「おやつ」として菓子、果物、芋等を支給する。一人一回分二錢(一日二錢の豫定)。その他隨時おはぎ或は副食物等を支給する。

(ヘ) 午睡取扱

午睡の習慣ある子供はお晝後十疊敷の部屋で午睡をとらしむ毛布、寝巻は午睡習慣ある子供の家庭より札を付けて準

備させる。三時以後は眠らせぬことにしてゐる。

(ト) 汚物の處理

三歳以上の兒童では比較的その心配はないが、休みの翌日にはよく下痢することがある、その際は助手が自転車で着換をとりゆき着換させる。着換を要せぬ程度であれば助手で適宜始末する譯である。

(チ) 急病に對する處理

昨年は急病が起つたものはないが萬一急病の場合は家庭へ通知して直ちに醫者の手當を受くることにしてゐる。

(リ) 託兒の送迎方法

高年の者は一人で自由に行き來するが、虚弱兒童及人馴れせぬものは助手で送迎をする。朝は助手が來る際途中のものを誘つて來るやうにしてゐる。

(ヌ) 救急藥其他の準備

傷藥、絆創膏、繃帶、脫脂綿、オキシフル等が準備されてゐる。

(ル) 其他

春秋二回小學校の分教場に於て兒童の運動會を開催したる處兒童よりは母親の喜びが一方ならず部落融和に資するところが甚大であつた。

十、經營收支(昭和十三年度)

收入の部

村費補助給	一九八圓
部落有志寄附	五八圓
(保母給料五〇圓、期間延長分補助三〇圓、間食費九六圓、設備玩具二二圓)	

部落負擔

計	一五九圓
支出の部	四一五圓

保母給料

助手給料	八二圓
間食費	三八圓
寺院謝禮	六三圓
設備費	一五三圓
玩具費	一六圓
慰勞金及雜費	二七圓
計	一四圓
	二二圓
	四一五圓

十一、効果

- (イ) 婦人の勞働能率を高め經營に於て勞力の餘裕を生じ之を應召家族への勞力奉仕に捧ぐる事が出來た。
- (ロ) 出所兒童を通じて共同心を涵養し部落協和の精神を強化することが出來た。就中二回に亘つて兒童の運動會を開催したる所が婦人を主として全部落民の過半の參集を得て部落民の融和に資する所大なるものがあつた。
- (ハ) 規律ある運動、食物、遊戲の淨化による保健衛生上の効果は極めて甚大なるものがあつた。又兒童の共同生活による精神上の効果亦看過することが出來ない所である。

(ニ) 託児所入所のため特に着物、辨當の副食物に多くの経費を投ずる懼れがあるので特に各家庭に此の點を注意した結果各種の弊害は認めなかつたが往々斯様な弊害を生じ易いから注意する事が必要である。

十二、改善すべき事項

時局下農村勞力不足の折から託児所の重要性は愈々重きを加へたので今後一層内容の充實を圖つて期間も延長し、將來は通年制にする考へである。

十三、其他参考となるべき事項

(イ) 副食物種類別調査表 (調査人員七六、春夏六回集計)

種目	人員	種目	人員	種目	人員
鹽鱒	二八	煮メ	二六	魚	二二
筋子	二二	ワカメ	九	トマト	五
鮭罐詰	一九	大根漬	九	鹽	四
油揚	一六	安子	一八	黄粉	三
味噌漬	一五	梅干	一五	油豆	二
味噌	一五	茄子漬	一五	其他	二九
胡瓜漬	一〇	奈良漬	八		
煮豆	二〇	デンプ	六		

(備考) 「煮メ」は主として野菜を煮たるもの魚は鰯、イナゴ、鮒等主なるもの、其他はおはぎ、餅、赤飯、團子等を持参し副食物を持参した人員もある。

同上期調査表 (人員八三 回数二)

種目	人員	種目	人員	種目	人員
魚	四七	イナゴ	一六	デンプ	四
鹽鮭	四四	筋子	一一	牛肉	二
煮メ	二九	茄子鹽漬	九	ゼンマイ	二
味噌漬	二五	煮豆	五	菜浸	二

(備考) 其他は鹽をつけた握飯

(ロ) 木崎村農繁期託児所兒童出席表 (表面略)

(ハ) 笠柳託児所調査表

御注意

- 一、託児所へ入るために着物や帽子などをつくらないで下さい、有合せの物で充分です
- 一、たべ物やおもちは持たせないで下さい
- 一、子供の泣くのは最初の三四日です泣くのも運動の一つです泣いても心配はいりません大切に取扱ひます
- 一、休ませないで下さい、子供は一日休むと又元に戻ります一ヶ月休まない子供に賞品を上げます

笠柳託児所調査表 (春秋)			
氏名	性別	年齢	年
調査 年 月 日			
身長	センチメートル		
體重	キログラム		
胸圍	センチメートル		

其の二 部落經營に寺院協力の一例

和田野農繁期託児所

京都府竹野郡彌榮村

一、經營主體 和田野部落

二、沿革概要 大正十三年頃から和田野部落西方寺住職小石惠運師主唱の許に毎土曜日、日曜日に翌年入學する小兒二十人程を集めて日曜學校を開いて入學前の豫備教育をなして來たのであるが京都府農會の獎勵する農繁託兒所の開設について同村農會技手藤原利一氏が率先して之を提唱し婦人の農業勞働への進出、部落の融和協調、兒童の訓育等に資する目的から住職と懇談の結果昭和三年春から日曜學校を改めて茲に農繁託兒所を開設することゝなつた。

住職夫妻は兒童愛撫の念厚く社會事業に理解を有ち何等の報酬を需むることなく、十年一日の如く孜々營々として託兒所の經營に獻身的に従事される篤志家であり、中心人物である。

當初託兒所は寺院の本堂に於て行はれて來たが昭和六年部落の長老であつて竹野郡農會長たる萩原光藏氏の斡旋によつて寺院の境内の茶畑を整理して敷地となし有志の寄附を求め經費千六百餘圓を投じて託兒所の新築を見るに至つたのである。

三、和田野部落の概況

(イ) 關係戸數 一五一戸 内農戸數八八戸

(ロ) 耕地反別 七二町八反歩

(ハ) 經濟狀態 農家の外機家十二戸(此の機臺數二五〇臺)

其他商工業であつて機業家の有力なる者があつて所謂農村と工業との融和した部落であつて經濟狀態は良好である。

村農會は部落農家組合の強化を圖り、共同作業場の經營、共同肥料配合、共同醬油製造、産米改良、採種圃の經營等共同事業を勵行して一致協力農事改良に努力しつゝある。

四、託兒所の位置 竹野郡彌榮村字和田野、西方寺境内にあつて部落の中央に位してゐる。

五、時期及期間

(イ) 時期 春秋

(ロ) 期間 春 自五月二十五日 至六月二十五日 秋 自十月二十日 至十一月十九日

六、受託兒童數(最近三ヶ年)

年度	種目	三歳以上七歳未満	合計
昭和十一年春		男二七、女三四	六一人
同 右 秋		男二九、女三四	六三人
昭和十二年春		男二八、女三六	六四人
同 右 秋		男三〇、女三七	六七人
昭和十三年春		男二九、女四三	七二人
同 右 秋		男三一、女四一	七二人
(備考) 昭和十三年出席率		春九二%、秋九七%	

七、託兒所の施設

(イ) 建 物 昭和三年から昭和五年迄寺院本堂、昭和六年託兒所建築 四間半に六間の板の間建物竝に間四方の休養疊間外玄關便所、總坪數三七坪、建物正面に佛像を安置してある。

(ロ) 運動場 一五〇坪

(ハ) 娛樂設備 ブランコ、滑臺、シソー、圓木、水遊場、オルガン、蓄音機、ラヂオ、紙芝居二二組

(ニ) 食 器 湯吞器若干

(ホ) 衛生用器 手洗場設備

- (ヘ) 炊事施設 無し、中食は全部辨當持參
- (ト) 其 他 尊影、繪掛圖、教育的繪畫等設備す
- 八、擔當者 住職 小石 惠 運(三十九歳)
妻 小石 峰 子(三十五歳)
- (イ) 保 姆 保姆一名、保姆助手二名
- (ロ) 保姆の資格條件 保姆は住職の妻女が専ら之に當られてゐる。目下住職應召中であるけれども獻身事に従はれつゝあつて保姆助手二名、一名は小學校教員の妻女、一名は近所の老母で何れも保姆を助け熱心事に従つてゐる。
尙日曜日等には小學校女教員遊戲唱歌等を臨時的に教へることゝなつてゐる。
- (ハ) 給與の有無 凡て無い只保姆助手は部落の夫役を免除する位である。

九、經營の概要

- (イ) 開所時刻 春 午前七時半より午後七時迄
秋 午前七時半より午後五時半迄
- (ロ) 受託兒童の衣服 自由
- (ハ) 受託兒童の制限 無し
- (ニ) 保姆の訓育狀況 保姆は社會課、婦人會等主催の講習會に毎回出席して訓育を受けてゐる。
- (ホ) 中食給與か又は授乳方法の概要
全部辨當持參、三歳以下の者が無い爲授乳しない。
「オヤツ」午前一回、午後一回、センベイ、ビスケット等を與へる。

- (ヘ) 午 睡 十二時半から二時迄行ふ、午睡を奨励してゐる。
- (ト) 汚物の處理 保姆及助手は少しも嫌はず眞の母親の氣持となつて行ふ。
- (チ) 急病に對する處置 部落の村醫が診療される。(期間中二回位兒童の診療を行ふ)
- (リ) 救急藥其他の準備 救急藥を準備す。
- (ヌ) 託兒の送迎 無し
- (ル) 其 他
- (一) 保育科目 遊戲、唱歌、お話、手工、散歩
- (二) 時間割 九時迄 自由遊戲、九時—一〇時 間食・唱歌・遊戲、一〇—一一時 手工、一一時 晝食、一二時半—二時 午睡、二時—三時 自由遊戲、三時—四時 遊戲唱歌、四時—五時 お話、五時—七時 散歩。
- (三) 託兒所終了式を舉行して皆勤證を授與する、尙秋の終了式には明年小學校へ入學すべき者には紙鍬等が與へられる。終了式には小學校先生、役場・農會並兒童の父兄等全部出席して兒童の遊戲、唱歌等を行つて和氣霽々たるものがある。
- (四) 昭和六年大阪朝日新聞社から表彰され表彰狀並慈愛旗を受けてゐる。

一〇、經營收支(昭和十三年春一期末)

收 入		支 出	
府 補 助	八、〇〇	設 備 費	一〇、〇〇
村 費 補 助	一〇、〇〇	玩 具 費	二、〇〇
區 費 補 助	一五、〇〇	オヤツ 費	三四、〇〇

寄附金

八、〇〇

雜

費

八、〇〇

特別寄附金

二五、〇〇

計

六四、〇〇

計

六四、〇〇

一、効 果

農家並機業家其他家庭の勞働に多大の效果がある事は勿論、子供を通じて部落の融合一致、子供の團體的訓練に効果があるのみならず、宗教心の涵養、保健衛生上にも有効であつて一同の禮讃するところとなつてゐる。

彌榮村内に於ける託兒所所在地

和田野、木橋、溝谷乙、等樂寺、船木、黒部、堤の八部落

其の三 部落經營に寺院婦人會協力の一例

正條農繁期託兒所

——兵庫縣揖保郡神部村——

一、經營主體 正條部落

二、沿革概要

(イ) 動 機 同村々長であつて同郡教育會長である圓尾幸藏氏は、農繁期に於いて農村乳幼児の數々の罹病災禍は之れ等の母姉が生活の必要上餘儀なく家庭から離れて育児哺乳等を顧る逞がなく、終日野外に汗と泥土に塗れて農作勞働に服せねばならぬ實情に在るの所以に鑑み、夙に之が救済施設を實施して保育上遺憾なきを期し且つは之れ等母姉の勞働能率向上に備えしむるの最も緊要であることを唱導し、之れが具體策として農繁期託兒所の開設を企圖し、各部落の區長、神官、僧侶、婦人會等に懇懇せられたのを動機と見る事が出来る。

(ロ) 沿 革 斯の様にして昭和二年正條部落に於ても淨榮寺住職小宅鳳靜師は全部落區長及婦人會長に計られる一方、自らは主宰者として任じ區長婦人會長協力の下に其年六月淨榮寺境内に開設することになった。而して先づ同師

夫人小宅つるゑ氏を主任に擧げ、助手としては婦人會員三名宛が毎日交互保育に任ずることとして種々開設上の準備を進め、六月十一日七〇名の幼兒を受託し、呱呱の聲を揚げたるに始まるものである。斯くて爾來毎年度六月及十二月の二期農繁期に開設し、同村村長並に小學校の指導と村民並有志の後援と相俟て漸次改善充實するを見今日に至つておる。

三、區域内の概況

(イ) 關係戸數 部落總戸數 一三八戸 (農家戸數七五戸)

(ロ) 土地反別

種 別	總 反 別	農家一戸當り反別
田	五〇七 _反	七、一〇四 _歩
畑	九三	一、三〇三
山林	一四四	二、〇〇〇
原野	一二	〇、二二〇

(ハ) 經濟狀態 總戸數一三八戸中農家戸數七五戸であつて、農家でない大半の者は近隣の播磨造船所並に部内の金田農具製造所等に勤務又は就勞するの外各種營業に依つて生活するを例としてゐる。

四、時期及期間

(イ) 時 期

春並秋

(ロ) 期 間

春 自六月十三日——至七月三日
秋 自十一月十日——至十一月三十日

五、受託小兒數

年度別	種目	三歳以下(乳 幼児を含む)	四歳以上 七歳未満	合計
昭和十一年	秋	二二〇	六六六	八八六
昭和十二年	秋	二二六	五五五	八八一
昭和十三年	秋	三〇一	五五七	八八八
平均	均	二五六	六五九	八八五

六、託児所の施設

- (イ) 建物 淨榮寺本堂を無料で借用し約七〇坪を利用する。
- (ロ) 運動場 淨榮寺境内約一二〇餘坪。
- (ハ) 娯樂設備 玩具(乗物、動物、積木、人物類)、繪本(色々)、ブランコ二臺、滑臺一臺。
- (ニ) 食器 淨榮寺設備のものを必要に応じて借用する。
- (ホ) 衛生用具 簡単な急救藥及脱脂綿程度を設備するのみであつて洗面用具、其他は寺院の設備を一時借用する。
- (ヘ) 炊事設備 晝食は各自の持参するものとして僅かに湯茶を用意する程度で萬事は淨榮寺庫裡の設備を利用する。
- (ト) 其他 右の設備以外に寺院設備の黑板及オルガンをも借用してゐる。

七、擔任者

- (イ) 保 姆
主 任 一名(淨榮寺住職小宅鳳靜師夫人)
副 主 任 一名(同上息女高女出身)
助 手 三名(但し助手は婦人會員に於て順選的に毎日而も午
前と午後に分ち三名宛交替其任に當るものとす)
計 五名

(ロ) 保姆の資格條件(なし)

(ハ) 給與の有無 一切無給與とす

八、經營大要

- (イ) 受託開始時刻
春 午前六時に開始し午後六時に終了す
秋 午前七時に開始し午後五時に終了す
- (ロ) 受託兒童の衣服 別に制限しないけれども只「エプロン」のみは着用させることゝす。
- (ハ) 受託兒童の制限 別に制限をしない。
- (ニ) 保姆の訓育狀況 開設前小學校で保育案を作製配付して之れに準じて作法、唱歌、遊戲、圖畫、手工、童話等を行ふ方法がとられてゐる。
- (ホ) 晝食給與又は授乳大要 晝食は各自をして持参させることゝし乳兒に對しては其授乳時に母親の都合を打合せて置く又託児所へ歸來して授乳し得ない者は園場に同行して授乳させる。